

### 3 小寺の家臣に

重隆（官兵衛の祖父）は「目薬」で金ができました。

重隆は被官（家来）をやとい、被官は200名ばかりになりました。戦乱の世であり、重隆は当然のように御着城主・小寺への売り込みを考えました。

重隆は、息子の職隆（もとたか・官兵衛の父）にそのことを命じました。

小寺氏への手配は、広峰からなされました。

職隆は、気の優しい男で、ひとびとも彼を慕っていました。寡黙で、考え深いたちでしたが、この時代の人らしく行動は果敢でした。

「わし(官兵衛の祖父)より大きな器だったかもしれない」と重隆は考えていました。

官兵衛の性格は、たぶんに重隆・職隆のDNAを多分に受け継いでいるのかもしれない。

御着城では領主・小寺政職（まさもと）が待っていました。

職隆は、武士の器量は大いにあったとしても、小寺家では外様です。職隆を重く用いることは、もとの小寺家臣たちにとって面白いはずがありません。蔭で「目薬屋の分際で・・・」と悪口もあったことでしょう。

小寺家の家臣としての実力を示す必要がありました。

そのため、手っ取り早い方法は、どこか近在の小寺氏の敵を負かすことでした。

小寺に敵対していた香山（かぐやま）という格好の敵がいました。

香山は、もともと山崎郷と新宮郷の間にある地名です。

官兵衛の父・職隆は、大晦日に夜討ちをかけました。香山には明日は正月だという気分が油断もあったのでしょう。職隆は香山氏の首を、やすやすと取りました。

そして、香山の影響のあった揖保川一帯に触れを出しました。

「われわれは小寺の者である。今後、香山の無謀な支配は、もはやない。以後、小寺の殿の慈悲によって年貢を軽くする・・・」と。

\*写真：御着城跡

